

篠笛を知るゝ祭が育む日本の音々

森田 玲（玲月流初代 篠笛奏者）
森田香織（笛師・玲月流 篠笛奏者）

平成三十年十一月十八日 於・京都芸術センター

一、篠笛の魅力と特性

実演 月〔森田玲作曲〕／カミあそび〔森田玲作曲〕

馬鹿囃子〔伊勢大神楽〕／並足の笛〔岸和田祭だんじり囃子〕
桜〔日本古歌・箏曲〕

篠笛の特徴
発音の原理

二、篠笛の歴史と文化

○ 和楽器における篠笛の位置付け

日本の楽器（フエ・コト・ツヅミ・カネ）

日本の横笛（雅楽の笛／能の笛／篠笛／その他へ竹紙笛／浮立笛）
古代の横笛

○ 日本十二律

・三分損益法

○ 篠笛の種類

・均等孔の篠笛
・古典調の篠笛

・邦楽調（唄用）の篠笛

○ 篠笛の語源

ドレミの笛について

・江戸期の史料

・明治期の篠笛教本

三、篠笛ができるまで

女竹の伐採と選別／乾燥／矯め／孔彫りと調律／塗塗り／籐巻き

篠笛の分類表（試案） 森田玲（篠笛文化研究社）2018.10.18

● 最適（出自）
◎ 最適
○ 適している

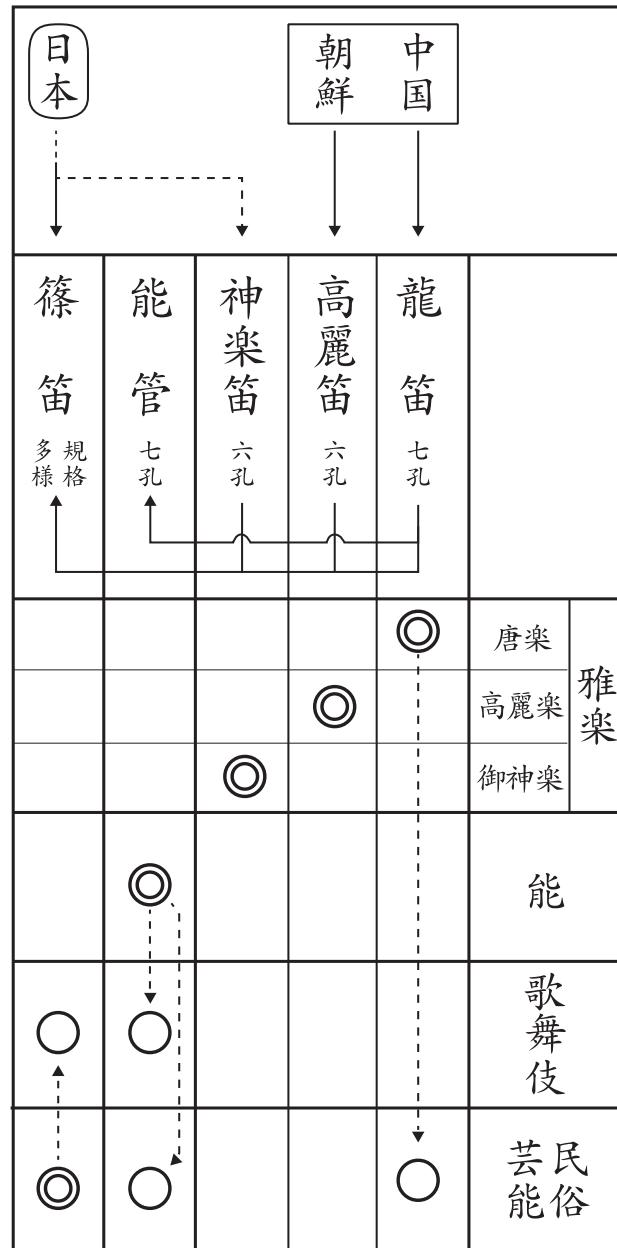
		民俗芸能	三味線音楽	日本古歌	和太鼓	洋楽系音楽
篠笛	均等孔	●				
	雅楽の笛に準じる					
	日本十二律	●	○	○	◎	ししだ 獅子田・蜻蛉・京師 あきつ みやこ
	三味線の調絃に合わせる					
調律笛	邦楽調（唄用）	△	●	○	○	あきつ まるやま みやこ ひばり 蜻蛉・丸山・京師・雲雀
	西洋 12 平均律					
	洋楽調（ドレミ）					○
古典調		○	○	○	○	○
		<3律>	<2律>	<2律>	<1律>	<2律>
邦楽調（唄用）		○	○	○	○	○
		<2律>	<2律>	<2律>	<1律>	<2律>
洋楽調（ドレミ笛）		○	○	○	○	○
		<全音>	<全音>	<全音>	<半音>	<全音>

特に右手の指が押さえにくい（篠笛の醍醐味である指打ちが困難）。

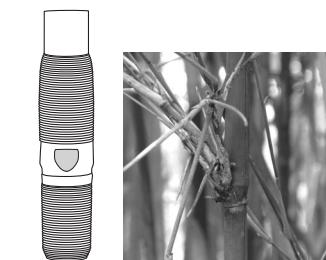
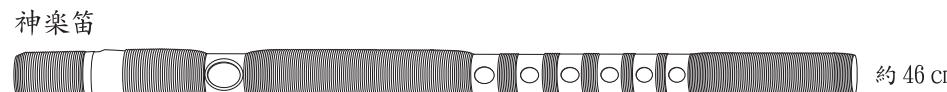
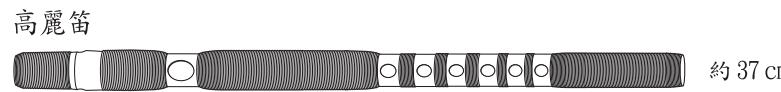
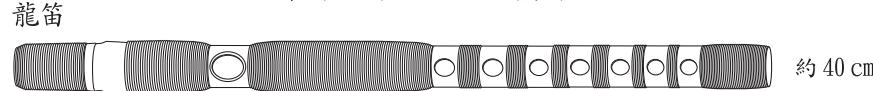
- ・近年、「洋楽調（ドレミ）」を「唄用」「歌物」と記す誤った記述が多くみられる。
- ・「唄用」「歌物」という言葉は、「洋楽調（ドレミ）」の登場以前から日本音楽で用いられている。
- ・現在、初心者のほとんどが「洋楽調（ドレミ）」で練習を初める（太鼓の練習を、和太鼓ではなくドラムで練習を始めるようなもの）。
- ・「洋楽調（ドレミ）」が奏者・楽器店・メディアで「唄用」と紹介されることが多くなり、
本来の「唄用（邦楽調）」の笛が認識されないようになってしまった。

★ 初心者、祭、学校教育の現場では「洋楽調（ドレミ）」ではなく「邦楽調（唄用）」「古典調」の篠笛の選択が望ましい。

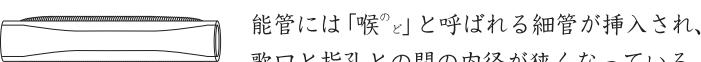
横笛系統図



篠笛以外の日本の横笛



笛の蟬^{せみ} 全体的に樺巻や簾巻を施し漆を塗る。歌口と管頭の間には重心を整えるために鉛などの錘^{おも}りを入れ、歌口の奥には蟬^{せみ}を詰めて栓とする。歌口の裏側には蟬と呼ばれる小さな突起状の装飾が付く（かつて葉柄を残した竹で笛を作った名残。八八貢参照）。写真は女竹。



竹紙^{ちく}笛 幕末から明治期にかけて日本で流行った中国の明清樂^{みんしよんがく}で用いられた明笛^{みんてき}・清笛^{しき}と呼ばれる横笛がある。歌口と指孔との間に響孔^{ひびきあな}があって、そこに竹紙（竹の内側の薄皮）を貼る。吹奏中は竹紙が振動して「ビー」という独特の刺激音がともなう。管尻に房を吊す。同じ構造の「竹紙^{ちく}笛」が、現在でも「唐津くんち」（佐賀県）など民俗芸能の中で用いられている。



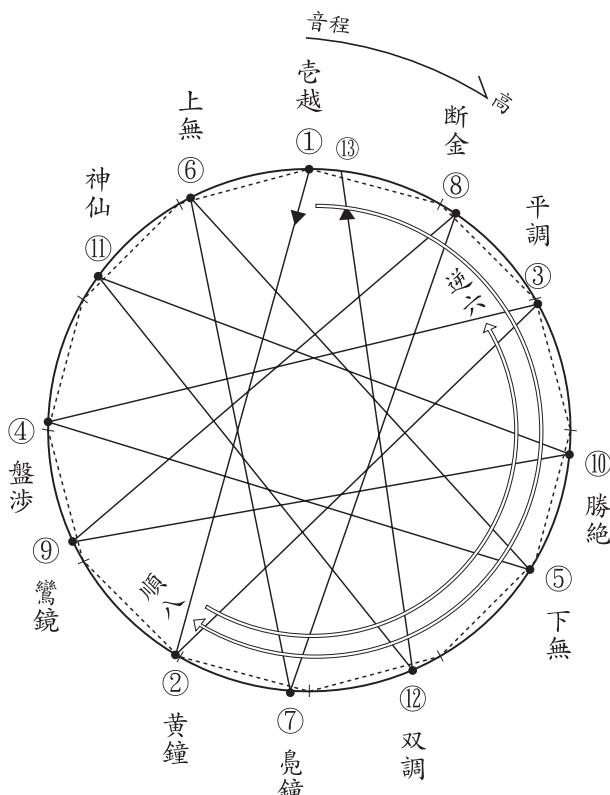
日本の楽器

カネコツヅミ

吹奏楽器（横笛・笙・簾篥・尺八など）
打楽器（太鼓各種）
絃楽器（琴・箏・琵琶・三味線など）
金属製打楽器（鉦・鐘など）

三分損益法 さんぶんそんえいほう

十二個の音は三分損益法という考え方で導き出されます。これらの音は、基準となる竹管や絃の長さから「三分の一」を引いたり（三分損 = $2/3$ ）、足したり（三分益 = $4/3$ ）することによって算出することができます。波長（竹管や絃の長さ）の比が単純であるほど、二つの音の親和性が高く心地良く共鳴します。1オクターブの関係、すなわち「1対2」の音同士は完全に解け合います。次に単純な比は「3対2」や「3対4」で、この関係にある音同士も完全に協和します、これらの比を用いて、順に音を決定します（九七頁を参照）。



日本十二律相関図

①→②→③・・・と、飛び飛びに親和性の高い音が導き出される。「点線」は「壹越」を基点とした時の12平均律（1オクターブを十二均等分）を表す。日本の楽器の調律方法に「順八逆六」というものがある。これは、基準の音を含めて八律高い音を得、次に六律低い音を得る方法で「三分損益」に従う。

基準となる「壹越」の音程は時代によつて異なります。明治中期にイギリス人の音楽学者、エリス (Alexander John Ellis) が測定した音叉へ専門の楽人が調定した「日本音楽十二律ヲ示スヘキ調音叉」。明治十八年（一八八五）「ロンドン万国発明品博覧会」に出品され、現在は東京藝術大学に所蔵〉の数値は、「壹越」が 292.7 Hz（「黄鐘」は 437.0 Hz）でした（『諸民族の音階』邦訳一九五一）。

現在は「黄鐘」を 430 Hz とすることが多いようですが、この数値は、戦後、Cを「 $\sqrt{2}$ の累乗」で定める「物理科学ピッチ philosophical (scientific) pitch」（18世紀にフランスの数学者、ソヴール (Joseph Sauvage) が提唱）の C⁴ (2^8 乗 = 256 Hz) から平均律の A₄ (= 430.54 Hz) を求め、その小数点以下を切り捨てて 430 Hz としたものと思われ、歴史的な意義はなし）そうです（押田良久『雅楽鑑賞』の記述からの筆者の推測）。

西洋12平均律では、すべての半音は同じ音の幅 (100 cent) ですが、日本十二律の一律には大小二種類の音の幅があります（約 90.2 cent & 約 113.7 cent）。また、ある律を定める時に「順のうつり」と「逆のうつり」のどちらの手法を用いるかによつて、大小一律の配列順も様々です（九七頁を参照）。

三分損益による十二律の算出方法

長い (低い)

(1)

9.122
8.542
8.109
7.593
7.208
6.75
6.407
6.081
5.695
5.406
5.062
4.805
4.5

8.427
8.0
7.491
7.111
6.659
6.320
6.000
5.618
5.333
4.994
4.740
4.5

9.0

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

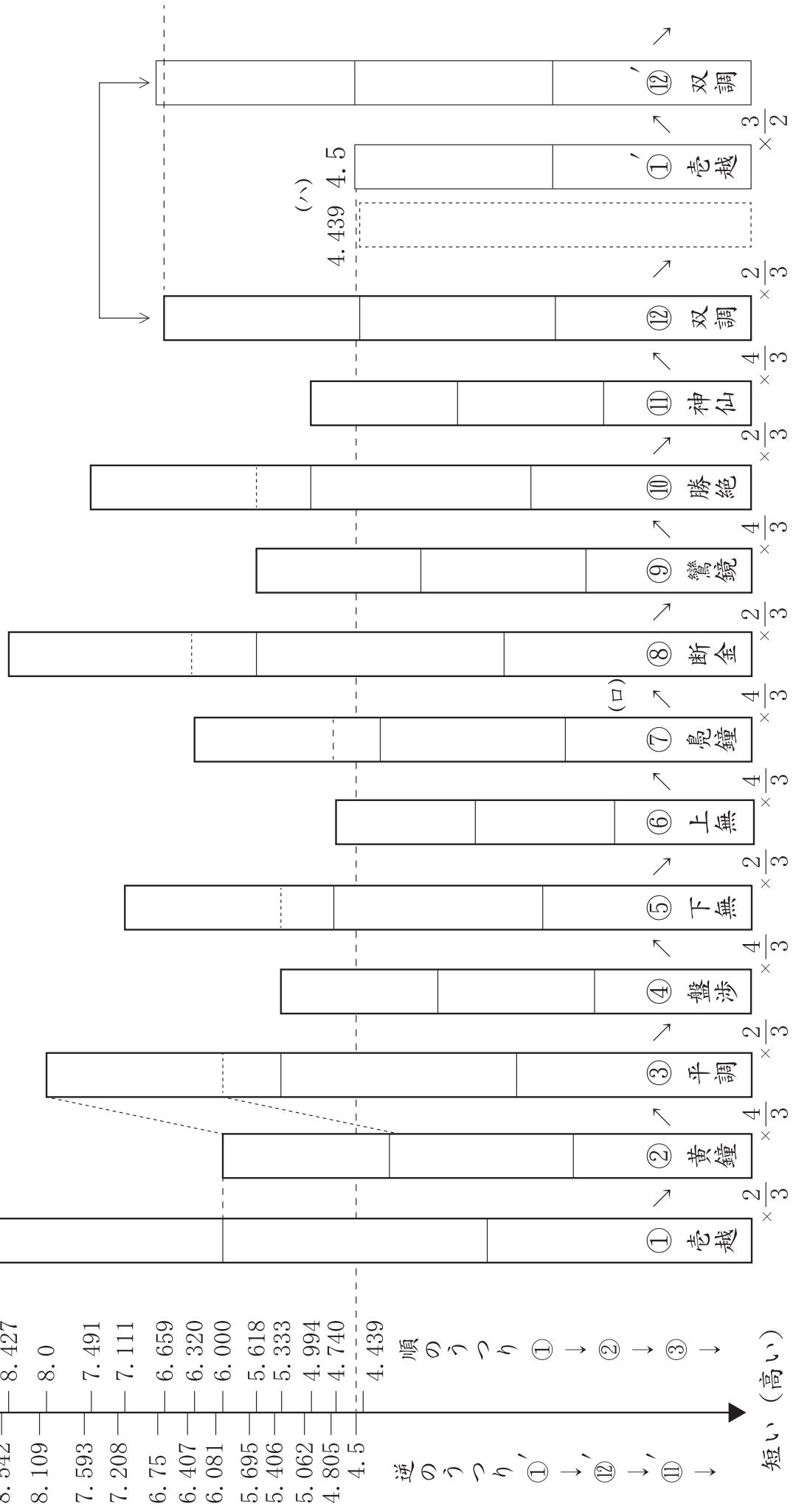
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

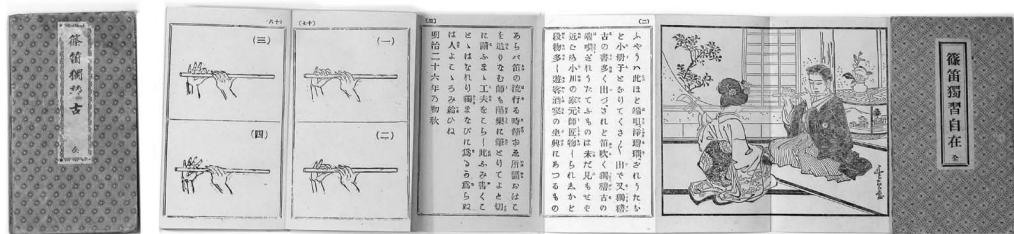
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

順のうつり・逆のうつり『糸竹初心集』に見える表現。

「順」は「三分損益」に同じ。「逆」は9(あるいは半分4.5)から逆算する。「逆」よりも、わずかに長い弦・管が求められることになり、ピタゴラスコンマ分(約23.46セント)だけ低い音程の十二律が得られる。



文政4年（1821） （天保13年（1842）	屋代弘賢『古今要覽稿』第五 川竹なよ竹女竹／＼今俗に女竹をもつて篠笛草薙笛を作るものは即この遺風なるべし 【篠笛の初見】
明治8年2月起草 明治22年5月5日 （1889）	大槻文彦『言海』— 篠笛／一種ノ竹ノ横笛ノ名、里神樂、俗曲ノ囃子ナドニ用キルモノ。シノ。
明治25年5月12日 （1892）	「読売新聞」— 横笛の流行／＼頃日來ハ横笛が又流行し尺八ハ少し廃れりといへり
明治26年4月末の序 （1893）	小川源次郎『篠笛獨稽古』矢嶋誠進堂書店（明治44年7月5日第26版発行） 【能の笛方か】【本書と同じ運指の数字譜】
明治26年初秋の序	谷三十郎『篠笛獨習自在・篠笛師匠いらす』競争屋（明治26年3月7日発行の奥付） 同内容で題名の異なる『篠笛獨稽古・篠笛師匠いらす』がある 【小川源次郎の傍流と記す】
明治26年7月15日 （1927）	鶯聲散士『篠笛獨習之友』青木嵩山堂 【運指を片仮名で表記】 【傍線を用いて西洋音譜の表記を模す】
昭和2年10月5日 （1929）	大岡紫山編『篠笛俗曲集』前川合名会社 【数字譜（本書と異なる番号）で傍線を用いて西洋音譜の表記を模す】
昭和4年9月30日 （1929）	町田嘉章『昭和笛吹奏の手引』十字屋楽器店 【数字譜（本書と類似の番号）で傍線を用いて西洋音譜の表記を模す】
昭和7年10月15日 （1932）	五世・福原百之介（助）『篠笛音譜 手ほどき篇』篠笛会 【呂音と甲音を漢数字と算用数字に分けて表記】 林鼓泉（五世・福原百之助）『黒美寿』私家版 【篠笛の新案調律法の詳細あり】 【新案は五世・福原百之助考案の篠笛を指すか】
昭和18年より執筆 （1943）	『官報』第四九八五号（価格等統制令下の価格）— 「篠笛 新案一號 同二號」 【新案は五世・福原百之助考案の篠笛を指すか】
昭和18年8月24日	



明治期に発行された各種篠笛教本（筆者蔵）

トーチヒヤリロー

ヒヤリツヒヤールヒヤリトート

トーチヒヤリロー

ヒヤリツヒヤールヒヤリトート

トルロートルロトラヒラヒ

チヒトツトーチヒヤリロー

トートロトラー

トロツトラヒラ

ツチヒヤリトラヒラトート

